

浦島太郎 その2

また、最近私の身に起こったことですが、こういう事がありました。

友人が亡くなってお葬式に行った時のことです。友人は大学の同級生でした。

町はずれの葬儀場へ行った時、会場に入ってすぐに違和感を覚えました。

辺りを見渡しても、誰一人知った人が見当たらないのです。

何度も見覚えのある顔がないか探しましたが、顔見知りの方は一人もいませんでした。

「あれー？」「えー？」「なんでー？」という感じがまずしました。

とりあえず故人の奥様に挨拶に行こうとして、控室まで行って奥様を探したのですが、なかなか見つけれませんでした。

というのも奥様は思っていたよりももっと身体が小さくなっておられて見違えてしまったからです。無理もないです、奥様に以前お会いしたのは御当人の結婚式の時でしたから……。

自分の名前を言いましたが奥様は心あたりがない様子。

それで大学時代の同級生であることを明かしました。

それでもなおげんな顔をされています。

それで「先日奥様御自身からお電話を頂いたんですよ。」

と言ったのですが、それでも狐につままれた顔をされています。

私は会場を間違えたのかと一瞬思いました。

結局お通夜が終わるまで顔見知りの方とは誰一人会わず、献花の提供者にただ一人だけ同級生の名前を見つけたのみでした。

どこか異国に来たような気持ちの中で、読経だけが続いていました。

そのようなお通夜が8時頃終わり、外に出ると街はずれのせいかわかりはほとんどなく真っ暗でした。

タクシーを呼び運転手さんと会話をして、はじめて言葉を発しホッとしたのを憶えています。

まあいわば、これも私の初めての浦島太郎体験と言えるのではないかと思います。

本当は友人たちも居たのですが、顔が変わってしまっていて分からなかったのかもしれない。

おそらく時間と世の中は私の意識とは別にはるかに速く進んでいて

私が初めてそれに思い知らされただけのことだったのかもしれない。